

# 解放直後・在日済州島出身者の生活史調査（14・上）

—— 金玉来さんへのインタビュー記録 ——

藤永 壯／高 正子／伊地知紀子／鄭 雅英／皇甫佳英  
高村竜平／村上尚子／福本 拓／高 誠晩

A Survey of the Life Histories of Resident Koreans in Japan  
from Jeju Island in the Immediate Postwar Period (14) — Part I —  
— An Interview with Kim Okrae —

FUJINAGA Takeshi, KO Jeongja, IJICHI Noriko, CHUNG Ahyoung  
HWANGBO Kayoung, TAKAMURA Ryohei, MURAKAMI Naoko  
FUKUMOTO Taku, KOH Sungman

本稿は、在日の済州島出身者の方に、解放直後の生活体験を伺うインタビュー調査の第14回報告である。この調査の目的や方法などは、「解放直後・在日済州島出身者の生活史調査（1・上）」『大阪産業大学論集 人文科学編』第102号（2000年10月）に掲載しているので、ご参照いただきたい。

今回の記録は、秋田市在住の金玉来さんのお話をまとめたものである。金玉来さんは1924年、済州島新左面咸德里（現・済州特別自治道済州市朝天邑咸德里）のお生まれである。

インタビューは2010年3月21日、秋田市の大学コンソーシアムあきたカレッジプラザで、藤永壯・高正子・伊地知紀子・鄭雅英・皇甫佳英・高村竜平・高誠晩、および済州4・3研究所の金昌厚さん、立命館大学の文京洙さん、秋田県朝鮮人強制連行真相調査団の田中淳さん、秋田県平和運動労組会議（当時）の工藤新一さんが聞き手となって実施した。テープから起こした原稿は皇甫が中心となって編集し、用語解説は村上尚子が、参考地図の作成は福本が、最終チェックを高村と藤永が担当して完成させた。

そしてまことに残念ながら、金玉来さんは2013年9月7日に逝去された。本稿の完成をご存命中にご報告できなかったことをお詫び申し上げるとともに、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

以下、本稿の凡例的事項を箇条書きにしておく。

- (1) 本文中、文脈からの推測が難しく誤解が発生しそうな場合や、補助的な解説が必要な場合は、[ ] で説明を挿入した。
- (2) とくに重要な歴史用語などには初出の際＊を付し、本文の終わりに解説を載せた。第4～13回報告で解説した用語については、丸数字で報告番号を、アラビア数字で注番号を記し、かっこでくくった（例：(④－＊13)は第4回報告の＊13をあらわす）。また、2000～2001年の第1回から第3回の報告でとりあげた用語は「(再掲)」と記して解説した。
- (3) 朝鮮語で語られた言葉は、一般的な単語や地名などは漢字やカタカナ、あるいは日本語の翻訳語で、また特殊な単語についてはハングルで表記し、発音を日本語のルビで示した。
- (4) インタビューの際に生じたインタビュアー側の笑いや驚きなどの反応については、〈 〉で挿入した。
- (5) 話者が語った日本語・朝鮮語は、話者の発音どおりに表記することを基本としたため、いわゆる「標準語」とは異なる場合がある。

なお本稿は言うまでもなく、金玉来さんの証言からとくに重要と思われる箇所を中心に抜粋、編集したものである。できるだけ客観性に配慮しつつ証言を再現しようと努めたが、編集の手が入っている以上、叙述に編者の主観が反映されている可能性は排除できない。本稿の内容に関する責任は全面的に編者にあることを、あらかじめおことわりしておく。

## 済州から大阪、そして東京へ

### 《幼いころの思い出》

——早速ですけども、お生まれは<sup>チュジュ</sup>済州？

金：そうですね。

——で、日本に來られた経緯だとか、特に私たちが一番関心を持っているのは、解放直後ですね、どういうふうな生活をされていたのか、お聞かせいただければと思います。お生まれは何年です？

金：えー、1924年5月8日生まれです。メモをちょっと書いて來たんです。本籍は<sup>さいしゅうとうちょうてんめん</sup>済州島朝天面[1924年当時は新左面]<sup>かんとくり</sup>咸德里です。お母さんはね、あの海女さんやってたようです。で、父親が職を求めて日本に來たんですね。私が1歳か2歳かよく分かりませんが、まあ、母親に連れられ大阪へ最初來ました。んで、吹田第一尋常小学校[現・吹田市立吹田第一小学校]へ入学しました。

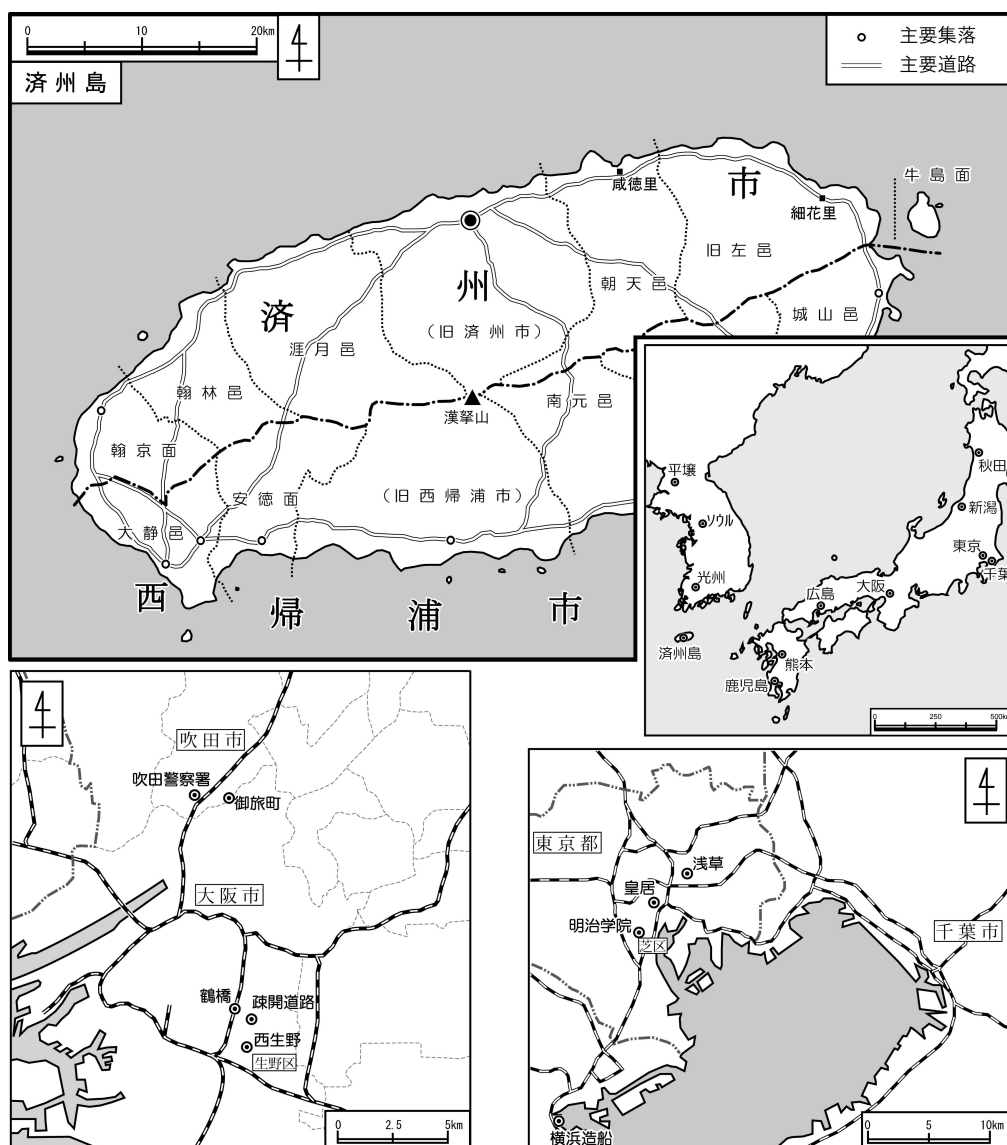


図1 本稿関係地図

で、このころは、あの差別がひどかったんですね。朝鮮（泣く）……まあ、そういうようなストレスありましたね。で、僕の名前は金玉来<sup>きんぎょくらい</sup>です、日本語読みますとね。[朝鮮語音では]金玉来<sup>キムオンネ</sup>というんですが、これ日本語でそのまま読むとキンタマコイ。キンタマコイっていうん。で、「朝鮮<sup>きんたまこ</sup>、金玉来い」。いじめられました。

んで、もとはこの面白いことがありましてね、日本へ来た時には、父親は全然会わないんですね。ということは、なんか左翼運動やっておりますね、僕会ったことないん

ですよ。

母親はあの、過去が車庫だった[もともと車庫だった家]と思います, その小っちゃい一軒家を借りまして、そこで生活しておりました。んで、母親は昔大阪で、晒し、このボロなんか集めてきて、塩酸かな、硫酸か、塩酸かなんかで浸けて、鼻ビューンってすごい臭いする、それ。真っ白なるんです。それやって乾かして、それをたたむ仕事に母親がついておりましたね。それで生活しておりました。

んで、僕は小学校何年生か、あの、覚えが全然記憶ないんですが、大金を拾ったんです。それが、その晒し工場の工場長の給料をそっくり、ポンっと落としちゃったみたいです。それふたりで拾って、すぐ交番に届けたんですね。そら、お前偉い、ちゅうわけで、もうふたりで。そんな時の価値、はっきり覚えてませんが、3円50銭ずつふたりで分けてもらったと思いますから、拾ったお金は60円か70円か。その金額、その貨幣価値がピンとこないですよ。そのもらったお金で母親が、洋服と、学生服と革靴買ってきて、そのお金でまかなったんです。それでそのころは、うどんが1個6銭だったんですよ。その時代にそういう経験をしました。

——お母さんが海女さんだったっておっしゃってましたよね。

金：ああ、うちの母、母親。そうそう、海女さん。

——それはどうやって分かったんです？

金：お母さん、自分で「私、あの、海女やってたよ」って。

——へえ、で、大阪に来られてからはどこも潜りに行ってないです？

金：全然。んで父親みたら[父親は]済州島から、結構千葉あたり行って海釣りしてね。で、うちのお母さん、そこへ行かないってことは、千葉あたり知ってる人いないんじゃないかな。知ってる人がいれば行ったよ。あの、晒し、こうやるより稼ぎいいと思うよ。だから行かなかったしね、もう。

## 《父のこと》

金：である日、父親の顔も分からないで何年か経った時に、吹田警察署[から]呼び出しありまして、「お前のお父さん、会いに来い」と。で、母親に連れられて行ったんです。じゃ、父親がこう（泣く）、アイゴ、これウェーウェーって、それ[泣き叫ぶ様子]を見せら

れました。今考えると、まあ、拷問ですね。その朝鮮の独立のためにそんなことしてたんじゃない？ 転向しろ、ということで。まあ、拷問をやったやつをですね、僕に見さして、泣くこと見さすんじゃないの？ 父親に早く転向させろ〔しろ〕と（泣く）。

んで、そういうことがありまして、今思えばあの、朝鮮人の組織で協和会\*<sup>1</sup>ってありましたね。協和会のおじさん、お婆さんたちは、お前のお父さん、パルゲンイだ。パルゲンイっていうことはアカっちゅう。で、子ども心に、なんでパルゲンイっちゅう。パルゲンイってアカだから、信号でもアカは怖いんだなあと思って。うちのお父さん、なんか悪いことしてるんだなあと思って。子ども心にも、そこ、ずいぶん傷つきました。

——あの、協和会の話もされてましたけれども、どういうふうなことをやらされましたか？ 神社へ参拝とか。

金：小学校の時に、自分ではっきり覚えてるんじゃなくて。だんだん、大人になってきて、あのおじさんが、お前のお父さん<sup>ア ポ ジ</sup>パルゲンイだよってさ。あれが協和会かっていう意識だったんだ。小学校の時に協和会の人だったからって特別にした覚えもないし、分かんないでしょ。

——やっぱりあの、日本の学校で神社に連れて行かされて参拝させられたとか、あの皇居の方に向かって遥拝とか、そういうのやっぱりやらされたんですよね？

金：うん。そら日本人と一緒に。ここに朝鮮人ありって気持ち強かったからさ、ね。朝鮮人バカにすんなよ、朝鮮人は半端じゃなくここにいるんだって気持ちで頑張ったから。人一倍かあーっと。人よりも一倍も〔人一倍〕軍国主義になったんじゃないの。

んで、小学校卒業と同時に、父親がもう転向したかなんか知りませんが、東京にうちをまた構えまして「東京へ来いよ」と。んで、母親と一緒に東京に行ったら父親あの、ゴミ、なんちゅうの、バタ屋？

——廃品回収？

金：うん。廃品回収のこう集める。まあ、「ケイ」(?) っていうたらなんだろうな、バタ屋さんって籠<sup>ひら</sup>ぶら下げてさ、紙拾ってるでしょ。それぶら下がりて書いてるわけですよ。そういう仕事やっておりました。ほいで「お前、学校どこ行く」っちゅうて。まあ、3校ぐらいあの、試験受けさしてもらいまして、3校とも通って〔合格して〕。んで父親の推薦で明治学院入ったわけ。クリスチャンだからね。で、明治学院へ入学さしてもら

いました。その時にはまあ朝鮮人いなかったですけど、台湾の人は結構おりましたね。  
台湾の友達ずいぶんいました。

《済州島の祖父母》

——お父さんのお名前は何とおっしゃいますか。

金：えー、メイクンっていう。<sup>きんめいくん</sup>金明燾。

——<sup>チェジュド</sup>済州島へは、行かれてないんですか。

金：あ、それであの、僕が明治学院の中学2年の時に、あの<sup>クン デ ファン</sup>君が代丸<sup>(⑥-＊14)</sup>ってあったでしょ。<sup>クン デ ファン</sup>君が代丸<sup>サム ジャン</sup>の事務長やってた人がうちの伯父さんなんですよ。

——なんていうお名前？

金：金、その時は<sup>キム シ フニ</sup>金始燾かな。

——<sup>キム シ フニ</sup>金始燾？

金：うん。んで、うちのお父さんは次男、次男ですね。[メモを見ながら]これが、これがうちの伯父さんかな？ これ、うち次男。これ長男。

——[伯父さんは]長男？

金：と思うん。それで、えー、あの<sup>クン デ ファン</sup>君が代丸<sup>サム ジャン</sup>の事務長やってた人が、今ちょっと切れちゃったからね。<sup>サム ジャン</sup>事務長で、そういうことで、あの、うちのお父さんは、あの一、なんか<sup>ヤンパン</sup>両班みたいだったんよね。戸籍見たらね。なんか勲章授与なんとかとか書いてあったんだもん。

——<sup>チェジュド</sup>済州島で、あの、<sup>チヨツ ボ</sup>族譜ご覧になって？

金：ええ、そうそう。うちの息子がね、あの、切り替えのなんかで、もらったやつ。えー、それで中学2年生[の]時に、このお祖父さんの息子、ブン、かなあ。この前まで覚えてたんだけど、なんか俺だめだなあ。お祖父ちゃんがね、ブン。これ、この字。

——あ、いるね。名前が。キム・ブン

金：今の記憶だとうこうなんですね。うちの息子、今、これ持ってるんだけど。んで、その

お祖父ちゃんに、うちのお父さんのこれ〔息子?〕を、見したいわけで、んで、その  
サ ム ジャン事務長に頼んで、サ ム ジャンただであの事務長のところへ泊まって見に〔会いに〕行って。

——君が代丸で。

金：君が代丸で。約20日、25日ぐらいいたのかな。その家の、お祖父さん住んでる家の、石でこうやってるんですね。そっから、こう上がってこういうふうにしてね、水が湧いてくるんですよ。上からの水は飲む水。で、こちらの米洗って、こっちは風呂みたい。あの、覗くと女の人裸で。子ども心であんな真っ白いいい体してんな。思って。みんなで〈一同：笑い〉。ほんであの、かわいい顔してたんでね。んで「あーい」とか言って。췁아요 [いいね]、とかなんか、やってたんでしょね。俺そんな時、朝鮮語全然分かんないんだから。で、あの、孫が来たっちゃうの噂で聞ってるから、みな、こうやってやってくれるなって。んで、俺は「うわー」って。

——<sup>ハムドク</sup>咸徳で？

金：咸徳。で、水がね、海の水なんですけど、もう透き通ってるんですよ。下、魚泳ぐの  
見えんだもん。それがあつ時間なると、ビューンて引いちゃうとね、約 200 メートルぐ  
らい先、砂場できる、ずーっと。で、歩けるんです。そのまま入って行ってね、魚、キュツ、  
突いったり、カニ、こうつかんでました。だから太刀魚カルチってあるでしょ、太刀魚カルチ。知  
らずにこうつかんだら、バーツてやって、シャー突いちゃって、バーツと切るんです。で、  
お祖母さん見せたら「あれ太刀魚カルチです」だって〈一同：笑い〉。

うちのお祖母さんが、なんか仏教かな。僕が行ったっていうんでね、貧乏しながらでも鶏と豚と飼ってますね。豚は、びっくりしたよ。こうやって、うんこしてパンとしたら、ブーしてこう、食べにいくからびっくり〈一同：笑い〉。出るもん止まって。記憶があるんですよ。で、うちの<sup>ハルモニ</sup>お祖母さんが日本から孫が来たからってね、鶏をつぶすのに、<sup>ナムアミダブル</sup>南無阿弥陀仏（泣く）、<sup>ナムアミダブル</sup>南無阿弥陀仏ちゅってって。そういうあの……。

——じゃあ、その時だけですか。済州島行かれたのは？

金：そう。それっきり行かないですね。ほいで、思想的に左翼の方でしょう。で、怖いから。聞くとところによればさ、4・3事件とかでね、あのすごいお互い人殺し合ったから、行くところじゃないって気持ちが強いの。俺的に、勉強一回しちゃったもんだから、向こう行ったら、すぐだめだ、殺されるって聞いた人がいる。いまだ行かない。今、あの、行く運動ありますしね、僕も死ぬ前に一回行って、先祖の墓へ一回行きてえ（泣く）。今



86 だからどうなるやら。まあ2, 3年うちになんか一回行ってみたいと思います。

## 戦時下の青春

### 《笑の王国》

金：で、事情がありまして、中3で〔明治学院を〕退学しまして。このままじゃあちょっとまずいな、という気持ちありまして、あの、芸能関係の放送をやりたいなと。いわゆる詩を読んだり小説読んだりして、それをラジオで流す。そういう試験があったもんでね、申し込んだんです。試験受けたら、その時日本放送協会っていうのかな、で、試験受けましたら、落っこ……。まあ、学歴で落とされたのか分かりませんが、落とされてして。

どうしてもそういう仕事をやりたくてね。そのころは水谷八重子で新派の劇団があったんです。水谷八重子さんそこへ。雪が降ってももう、雨降っても毎日通ったんです。したら、水谷八重子先生がくたびれちゃって。今度、この子なんとかしてやらな、かわいそうだと。最初、ずいぶん断っても「つらいよ、勉強した方がいいよ。つらい思いするだけだよ」つつつて。もう毎日通ったもんだから、入れてもらいまして、1年半ぐらいまでいたんですかね。したら役がつかないの。もう台詞がない役ばかりなんです。しまいには1年半もしたら飽きちゃってね。んで、浅草に「笑の王国」〔1933年古川緑波の発案で旗揚げした軽演劇の劇団。1943年解散〕ってあったんですが、そこ行ったら、すぐ来いっちゃうわけで。もうすぐ行って、すぐ役ついてもう、給料の5倍ぐらいパーンと上がっちゃってね。びっくりしたんです。

——「笑の王国」？ 浅草で〈一同：笑い〉。

金：いやあ、浅草いた時は楽しかったですよ。もてたしね〈一同：笑い〉。ご飯は付くしさ。んで水谷八重子さんとこ行ってたから、すぐいい役どんどんつけてくれて。ああ、これ天下だと思って（笑い）。

——あ、じゃあ「笑の王国」にいた期間はどれくらい？

金：だから水谷さんと1年半ぐらだから半年、8カ月ぐらかな。

——「笑の王国」に行くって言ったときに水谷さんは何も言いませんでした？



金：うんうんうん。だって役つかねえから分かってんじゃない。ありゃー、あの世界厳しいんですよ。上に上がつかえてるからね。下から行ったらさ、もう、研究生だからさ。先生来たら、お茶腕ちゃーんとね。お茶入れて持って、こうして、引っ込むたんびにお茶を出してさ、飲ましてさ。だからそれが初めて日本の着物のたたみ方から全部覚えて。うるせえんだ、あそこは。

——ああ、そうですか。

金：朝行くと「先生おはようございます」。両手付いて、ぱっとお茶でもちゃーんとやって。

——泊まるのはどこで泊まったんですか？

金：いや、うち。通い。うん。それがね、親がね芝区に住んでて、今でいう港区。その芝区に住んでましたよ。

——ということは、お父さんと一緒に暮らしてはったんですか？

金：その時はね。だから僕、床屋なんか行くとさ、ものすごい丁寧にやってくれるじゃん。俳優だっつってさ（笑い）。

——ああ、そうなんや。で、「笑の王国」に行って、その時に給料もらって。

金：給料5倍ぐらいもらったよ。

——5倍ぐらい。大体どれぐらいか覚えてます？

金：覚えてない。

——通いながらお給料もらって、それ、お給料どうしたんですか。

金：お母さんにあげてたよ。お母さんに。

——お母さんに送ってあげてた？ 大阪に？

金：いや、お母さん一緒にいるんだもん。お母さんにあげて、あとは自分の小遣いだけもらって。

——お母さんも、そしたら東京に来てはったんですか？

金：僕、東京に来る時、お母さんがなけりゃ一緒に来ないんだよ。俺の本籍の親だから、

母親ひとりだ。くっついてんだ。

《弟たち》

——ああ、そうなんですか。そしたら弟さんたちも一緒に行って？ 全員で？

金：弟たちはね、生活が苦しいから済州島<sup>さいしゅうとう</sup>送ってるみたい、うちの母が。実家で大きくなつたみたいよ。ある年齢ってから日本に来たわけで。

——そしたらそれは、戦後ですか？

金：さっき、俳優の話したでしょ？ そのころはいないもん。

——弟さんいない？ え、いつぐらいに〔日本へ〕帰ってきたんですか。戦後？ 戦前？

金：戦後かな。

——弟さんらは先生が戦争から戻って来はってから、いつごろ来たかは全然覚えてないですよ。それは4・3事件の後に来たかもわかんない？

金：俺まだ、小っ、小っちゃいからね。もうまだその辺はちょっと、私も記憶ないんでね。

——ま、子どもだけで来られたのかどうか、誰が連れて来たのか。

金：そう言えば、うちの家は弟がいなかったような感じが〈一同：笑い〉。

——生まれたのは覚えてるんですね？ 生まれたのはどこで？ 東京で生まれた？ 弟さんたち。

金：その生まれた記憶がないんだね。

——弟、ある日起きたら？ 〈一同：笑い〉 その記憶もないですか。たぶんその当時は家で産んだと思うんですが。1930年代やからたぶん。大阪で産んではるでしょうね。ということは、お父さんもそれまでは大阪にいらしてた？

金：うーん。あの、結局東京行く前につくった子どもじゃないのかな。生活苦しいから、たぶん。だからその、大阪にいるころはうちのお父さんはアカだから。俺も、顔知らないんだけどな。それで要はこっそり行ったんじゃないの。こっそり来た時はね、妊娠するみたい 〈一同：笑い〉。みんな、うちそうなんですよ。

——じゃあ、ご一家で戦前、東京に行かれたのは何年ぐらいということになりますかね。  
金：戦前，だから戦前，東京へ行ったのは小学校を終えてね，そのあくる日か，その年か行ったと思います。

——1950 年までには来てたんですね，そしたら。

金：僕が聞いたら [弟は] 本家へね，済州島送って，それで大きくなって来たんだろうな，  
いうことを聞いてはいる。俺もいつの間に登場して，いつの間に出てきたのかと思って  
ね，不思議な時代がありましたけどね。

### 《徴用，そして徴兵》

金：で，「笑の王国」へ行っている時に，徴用令かかりまして，横浜造船 [前身は 1891 年  
設立の横浜船渠。1935 年三菱重工業に吸収合併，1943 年三菱重工業横浜造船所と改称，  
1983 年閉鎖] へ入ったんですね。横浜造船に入りまして，寮から通うんですが，私が  
体壊してね，しばらく休み，なったんですね。で，休みの間じゅうに，もう三日ぐらい  
でしたのかな，で，三日目ぐらい少し調子がよくなったもので，起き上がって便所掃除  
をして。みんな一生懸命働いたのに俺ひとりこんな寝てたんじゃ申し訳ないちゅうわけ  
でね。

もうその時，私自身が皇国臣民になってました。皇国臣民，もう，燃える青年になって  
おりましたからね。ほいで，便所掃除きれいにしたらさ，それが認められたって見えて，  
横浜造船にこの少年訓練所っていうのがあったんですね。小学校か中学校卒業するとす  
ぐ職場へ入れないで，一応訓練さすんですね。そこの助手に抜擢されまして。その時そ  
この所長っていうのが下士官だったんでね。で，そこの助手をやっておりました。

まあ 20 歳になったもので，あの，芝浜松 [現・港区浜松町] の区役所で身体検査やつ  
たんです。で，この時ものすご痩せてたんです。気合ものすごい入ってたんです。で，  
甲種なっちゃったんです。甲種合格。んで，その後からかな。徴用 [徴兵検査] の甲種  
合格で徴用終わってあの，入隊の満 20 歳。だから 1945 年だったのかな，入隊したん  
ですね。第 6 師団 45 連隊重機関銃中隊，ここへ入った。入営したんです。

ほいで，私，入った部隊は重機関銃なんです。重機関銃でこんなでっかいやつ。銃身  
だけで担ぐと，60 キロか 70 キロぐらいあるんですね。で，普通，練習する時は，四つ  
にこう，四つなってるんですね。で，これ 4 人で担いで，行軍する。で，僕がなんか燃  
えてたせいか，4 番銃手。4 番の人がいつもバンバンバンバン撃つ，撃つ係だ，担当なんだ。

だから成績よかったんでね。

ほいで練習の時に、みんなこう分解して銃手は銃身だけ担ぐんですよ。そいでダーッと練習だから、どんどん走りながら交代するんですが、あんまり長く走ってるうちにみんな疲れちゃって、もう交代してくんない。んで、4 番銃手だから、俺は一番大事だから、一番俺がたくさん担いでくんだけど、もう少しで兵舎へ戻るちゅうところになったら、足がもつれちゃって、バーツと倒れたんです。バーツと。倒れながらこの銃身を離さないでカーッと持ってやったんです。で、これ、えらいやっちゃ。天皇陛下からいただいた、すごい重要、大事なもん、宝なのに、守ったっていうわけですよ。みんなが集めて。そしてあの、[創氏で名字が]<sup>いまがみ</sup>今上ってなっておりますからね。「今上見習え」つって。そういう、あの状況もありました。

今でもあの機関銃部隊ちゅうのはね、山から山へこう[移動]する時に、この僕らの時代、この無線ちゅうのいないんですね。だから線、バーツと引っ張ってやる。その線、引っ張る間に言葉で伝えなきゃいけないから、だから声がすごーく通るんですよ。もうそういうふうに練習さすから。「鉄砲持て」とかですね、そう「構えろ」とか。そういう交代、順番順番に、伝えていくんだね。最後はちょっと変わった状況になる場合もあったらしいけど、それで声ものすごく通るんです。今でも「わあー」ついたらもう 100 メートル、200 メートルぐらい聞こえるから。

であの、兵隊行く時にはさ、千人針と、あの、旗に書いてもらうでしょ、分かるんですよね。みんな名前、水谷八重子とかみんな、偉い人の名前いっぱい書いて、芸能人の、書いてもらったんですよ。ちょうどあの、2000 名が戦地へ行きますよ、ちゅって決まった時にそこに残る、古い兵隊って書いて古兵っていうんですが、残る兵隊たちがいるんですよ。「お前、戦地行って戦死しよったら何も残んないから、記念に[寄せ書きした旗を]置いてってくれ。俺が守ってやっから」「ああ、そうですか」。あれね、旗を置いて。それを置いてけば[寄せ書きの旗が手許にあれば]、今結構いい宝なるんでね〈一同:笑い〉。

それで終戦なりましてね。あ、終戦の前に、うちの部隊はあの、45 連隊は 2000 名、アッツ島[アリューシャン列島西端の火山島。アメリカ領でアジア太平洋戦争での日米間の激戦地]へ向かって船 4 隻乗って出征したんです。で、私は残されたんです。なんで残されたか分かりませんが、その前、陸軍部、第 6 師団入った後に 6 カ月間の初年兵教育受けまして。その後また選ばれて、熊本の陸軍病院に衛生兵として教育を受けにまた行ったんです。で、帰ってきてから本部隊が船 4 隻乗ってアッツ島へ向かって行ったんです。で、私は残されて。今考えるとまあ、成績がいいから次の部隊入った奴らに教育さしてもらおう[させよう]、さす係、さすぞって残したんじゃないかなと思います。

終戦後聞いたんですが、その船に乗って 2000 名はもう、魚雷ボーンって戦争せずにみな、沈没でパーでね、ということだったようです。

## 《終戦》

金：終戦になりまして、私は鹿児島にいたんですが、うちは機関銃部隊だから馬が何匹もいたんですね。馬を民間の牛と取り替えて、毎日白米、真っ白お米に、もう酒は飲むしさ。負けて酒飲ましてくれるんだもんね。そういう生活を何カ月間か、やっちゃいました。こんな太りましたね。だから、なんか落としても拾<sup>ひら</sup>えないですよ。腹がこう、こう股開いて。だからその時目方は 70、80 キロ近くあったんじゃないかなって、今思うんですよね。

——先<sup>ソンセンニム</sup>生、終戦直後に鹿児島で軍隊の馬と、牛を交換するんですか？ 軍馬があるんで、それを牛と交換して、その牛を食べてた？

金：部隊で食べてた。やっぱ、俺たちの場合はさ、軍馬でしょ。軍に入ってたから [馬は] 食べられない。だから民間に払い下げて、代わりに牛もらってさ、ね（笑い）。

——うん。それで太ってた。

金：ええ、あの人 [インタビューのメンバーを指して] より太ってた（一同：爆笑）。今考え、想像できないんだよ。

——先生はお歳にしては背が高いですね、結構。

金：そうですね。明治学院通う時、あのちょうど、省線電車 [鉄道省営の大都市周辺近距離電車。現在は JR が運行] 乗っていくんですよね？ 皇居の前行くとみな一斉にお辞儀するじゃないですか、ね。最敬礼ぽってやって、こう横見ると全部こっから、こう見えた。

そのうちに軍が解体されまして、もう帽子も全部、襟章も全部はずれてね。

んで、僕はもうその時、明治学院通ってた、ちゅうことで、[徴兵され入営した後に]「幹部候補生の試験を受けろ」つちゅ言われた。あん時から、なんか戦争だけは嫌だなあ、気持ちあったんで、「嫌です。いや、僕あの、中退ですから」つって。「中退でも受けられる」つて。「いやあ、頭悪いから」。なんとかか逃げましてね、受けなかったんです。

んでもう、成績 1000 発 1000 発、あの、月ごとにこう何年経った、成績上がった、上

がってるんです。最初は〔襟章の〕星が1個〔二等兵〕なんです。んでそんな次は、星2個〔一等兵〕、星3個〔上等兵〕。戦争終わった時は、星無しの兵長っちゅうやつで、金糸でいっぱい入る。そういうやつになってました。

終戦と同時に各地方に自分で行き先だけ決めて行くんですが、えー、広島通るときは絶対、窓開けていけない。カーテン開けていけません。そういう軍の命令が出たんですね。なんだろうと思って、開けたら、あの、見えるわけさ、こうやって。こう見たらさ、僕、明治学院でクリスチャンですよ。で、クリスチャンじゃないけども何年もやってたら、神様いるもんだと思っちゃうね、自然にね。で、こうやって見たらさ、あれびっくりしたで、戦争ってゆうもん。燃えたら燃えたカスあるのにね、きれいにみな、バーッ風が吹いて、ピャーとみんな、ねんねしたみたいにきれいにザーッ続いているわけですわ。あらあー、もうその時は子どもなのか意識が浅いのかね、カーッて見てるうちに鳥居がぶっ倒れてる。それを見て、当たり前だ、戦争負けたんだから、向こうの神様に負けたんだからしょうがない。

して、ブーッて行っているとチャペル、十字架が倒れてる。「あれ、なんだのこりゃ」。向こうが勝ったんだから、チャペルを守れですよ。単細胞だったんでね、一瞬になって。〔チャペルが〕壊れてるから、「神様っていないんじゃないのかな」と思っちゃたんです、その時ね。だからいまだにもう宗教信じないです。無宗教。ただし、仏様とかそういうのは大事に守りますよ。

## 戦後の生活

### 《大阪へ帰って》

金：んで、大阪へ母親が住んでおりました。その時はまあ父親がね、再婚しましてね。他の所帯持っておりました。で、私が大阪来た時に、朝鮮の組織がありました。確か〔在日本〕朝鮮人連盟<sup>(5)\*11)</sup>かな。そこへ呼ばれてね、行って教育受けたんですね。こんな汚い朝鮮、朝鮮って言われて「汚い民族なのに」と思った男が、ここで朝鮮とはなんぞやっていう教育を受けましてね。「ああ、朝鮮人立派なんだなあ」。人を攻めたこともなけりゃ、人をね、やっつけたこともない。「いい民族なんだなあ」と。豊臣秀吉が朝鮮征伐なんて俺聞いたことなかったけど、とんでもない野郎だと。ああそれで、李舜臣<sup>イ・スンシン</sup>って偉い人がうちの国を守ったんだなあ、ちゅうのが分かってね。「ああ朝鮮人、バカじゃねえなって、偉いんだなあ」って目が覚めたね、初めて。ああ、朝鮮人生まれ

てよかったなと。それまでは「朝鮮人は嫌だなあ」（泣く）。

まあ、そういうことで、それでその時まあ、[話が] 飛びましたけど、大阪へ列車着いて大阪の鶴橋に降りたんですね。闇市場ができておりました。闇市場が駅、いっぱいね。んで、見たらりんご一山なってる。んで、退職金くれてたんですよ、終戦と同時に。退職金いくらか金額忘れちゃったけど。で、こう見たら、これ(笑い)。あれ一山買ったら[退職金は] 終わりだ。

俺ね、もらったこれ[退職金]、これだと生活して、生きていけるかなあと思った記憶あります。ずっと母親から助けてもらって、生きてきたんですね。うちの母親は言葉はあんまり日本語しゃべれないのに、数字も、学校も出てないから数字も、字も書けないのに、闇市行って、田舎行って。なんか着物持って行って、お米取り替えて、それをこっち来て販売して、俺を生活支えてくれたんだね。すごいなと思いました。

——で、お住まいは吹田だったんですよね、大阪におられる時は吹田にお住まい？

金：吹田ちゅうかね、正式名前はね、大阪府三島郡御旅町[正確には、大阪府三島郡吹田町御旅。現在の吹田市東御旅町・西御旅町]。

——お母さんはずっとそこに、いはったんです？

金：そうそうそう。あの、国帰るまでね。

——ああ、そしたら戦争終わって、あの商売<sup>チャンサ</sup>しはる時も吹田からどっかで、どっか物持ってたて。

金：吹田っていうかあの、三島郡御旅町ね。

——ずっとされてたんですね。

金：そうですね。不思議なんだよね。字も知らないのにさ、つけで置いてくんだもん。手帳ちゃんとあるんだもん。うちの母親の文字があるんだね、丸付けとか。「またそんなの、置いていって忘れちゃったらどうすんの」つったら「ちゃんと書いてあるから大丈夫だよ」。見してもらうとなんか、こう、暗号書いてあったんだけど。ああ、なるほどなあって。

——どこらへんまで行ってはったか聞いてはります？

金：どこかな。結構、隣の県まで行ってたんじゃないかな。



——隣の県？ 何を持って行ってはったかとかは知ってます？

金：やっぱり、なんか衣類。衣類をどっかで買い集めて、それを持って田舎行って。で、何回か僕もくっついて来たことある。買いすぎて、しまう[置いておく]とこなくて(笑い)。あの、小屋があるでしょ、あの、藁。それで隠してやった記憶が残ってますね。

——捕まったりとかは？

金：僕は捕まったことはないです。母親もない。なかったんじゃないかな。まあ、捕まる人はしょっちゅう捕まってね、やめちゃうらしいんだけど、まあ運がよかったのかな。

——その三島郡御旅町のお家の周りに、同じ、その済州島の人とか、他に同胞の人とかいはりました？

金：いたんです。結構いたんです。

——結構いたんですか。何軒ぐらいまでは？

金：僕はね、全然付き合いがないから、僕自身がね。朝鮮[人]に生まれたの、嫌で嫌でしょうがなかったから。朝鮮人って聞くだけで、もう嫌で逃げ回ってたから。だから、戦争終わって、総連[朝連の言い間違いか?]で教育受けるまでは、朝鮮人嫌で逃げ回ってたからね。

今思い出すとね。僕ら小学校の時さ、みな集まって、頭一個ずつで集まって、勉強会ぐるぐるっと回ってやるんですよ。んで、僕が男女組だったから、石野ちゅうのがね、級長なんです。で、ハラダキ・ミキコちゅうのが、あの、健康優良児でね、女性なんです。これを副級長。で、僕らはまあ、あと、4人ぐらいはまあ、成績いいほう、連中。で、ある日突然、石野って級長が僕に「もう、今度の勉強会に来ないでくれよ」「え？なんで?」「うちのお母さんが朝鮮人と付き合うなって言ったんだよ」。カー。あの時はほんとに。

兵隊から帰って来たらね、大阪行って(泣く)、一番に訪ねて行ったの。石野んとこ行ったら、まあ、前はね、門構えのいい大きい家に見えたのが、<sup>ち</sup>小さいんですよ(笑い)。門構えがね、小っちゃい。そこの石野級長、あの友だちは、病気なんだね。もう兵隊も行かないから、こんな痩せてさ。俺だよ、言ったら、お母さんも来たら、こう、お母さんも。ね、朝鮮人っていじめてたけど、こんな[小さく]なっちゃって、見たら小っちゃくてね、みすばらしい、かわいそうになっちゃってね。もう「負けてごめんな」っちゅって俺謝っちゃった。「負けてごめんな」っって(笑い)。

《民族への目覚め》

——教育を受けて、考えが変わったっていうその先生はどんな人だったか覚えてらっしゃいますか？

金：いやあ、いろんな人いたかなあ。

——いろんな人が教え、その学校はどこにありましたか？ 教育を受けた学校は。

金：あれ、どこだ。<sup>サミルハグォン</sup>三一学院\*2。

——大阪市内の方まで出て行きました？ 出て行って受けたんですか。

金：それがはっきりしないんだなあ。

——内容は記憶されているんですよね、教え〔られ〕た。

金：朝鮮民族の優秀性。

——歴史の話が中心ですか？

金：ほいで、<sup>きんにっせい</sup>金日成主席のね、偉大さ。ああ、すごいなと思ったけど。今はあんまり思わなくなったけどね、その時は、ああーと思ったんだ。

——言葉の教育はやはり、朝鮮語は？

金：朝鮮語はね、いわゆる独学だよね。

——あ、独学なんですか。でも、家の中では使っておられたんですよね、お母さんと。

金：お母さんとね。言葉じゃ、やったけど字は分かんないんだ。

——お母さんとお話するときは？

金：お母さんも字知らないし、父親はそうやって教育は一切、僕のこと何にも。まあ、そういう点では自由なのよね。

そういうことで、総連〔朝連〕の要するに、そんな時に、意識のある人たち、みんな日本の共産党にどんどんどんどん入って来たんですね。だから私も呼ばれて、日本の共産党の大阪の委員会の何かの委員やってて、しょっちゅう宣伝活動に鉛筆と消しゴム売ったりして。各家を回りながらね、日本の革命はこうしなきゃいけないとか、なんか一生

懸命やって。金がないところには、自分が自腹きって鉛筆、「これ置いてくから、子どもに使わせて下さい」って、あの、置いてきたりした経験があります。

## 《支部の活動》

——戦後はどこにお住まいだったんですか？

金：だから戦後はね。大阪、<sup>なかにし</sup>中西支部ってね、あそこだ。大阪のそこだ。<sup>なかにし</sup>中西支部っていう、<sup>チュンソ</sup>中西支部。

——生野区の西生野のですね。<sup>チュンソ</sup>中西支部いうたら。

金：西生野の隣ですね。そう、鶴橋とつながってる。

——<sup>なかにし</sup>中西支部のところには住んでなかった？

金：住んでいた。俺住んでたところから 200 メートルぐらい行くと、あの、鶴橋の道に出るんですね。

——疎開道路。

金：だから、近いですよ。

——そうそう。近いですよ。

金：ただし俺は大阪市〔府〕三島郡なん、あそこはね。んで、支部が<sup>なかにし</sup>中西支部、<sup>チュンソ</sup>中西支部。で、ちょっと行って右側は布施〔布施市。現在の東大阪市の一部〕。左が生野。

——この時代で誰か覚えてる人います？ この<sup>なかにし</sup>中西支部にいたときの。

金：ああ。……こうね、あ、この人っていうのは、こうイメージは出てくる。名前は全然知らないです。

——さっきあの、三一政治学院っていうのか、中央学院とかいうのがあって、要するにその時の民族についての、いろんな教育をした場所が確かにあったと思うんですけども、そこに行かれてたんですか？ 通われた？

金：それがね、はっきりね、そういうようなところへ行ったなあという、何カ月間かね、行った記憶があるんですよ。

——うん。誰から、どこから言ってきた？

金：支部の委員 <sup>ウイウォンジャン</sup> 長から。

——行こうと思ったきっかけみたいなのは何か？　そういうところで。

金：やっぱり自分で朝鮮民族、嫌だなんて思ったのが、なんでこんなに団体できるのかなあっていうとっから、知りたいと思ったけど。こんな嫌な民族、なんでこんなに集まって、こうやってるのかなあ。なんか下層民じゃない。下層民たちがなに騒いでんだっちゅう気持ちがあったんでね。だから知りたくなかったと思います。

——でもその時に、その朝鮮語は充分できないわけだから、授業、その教育は日本語で受けた記憶ですか？

金：そうですね。みんな日本語。

——その団体があるっていうのは、どうやって分かったんですか？　戦争終わって鶴橋に。

金：戦争終わって大阪来たでしょ。そしたら、朝鮮の人たちが来るわけよ。

——お家に？

金：俺、俺がいるっちゅうこと分かったら、声をかけに来るわけ。同じ年代の人たちが、家に。いわゆる勧誘だな。あの、「勉強行きませんか」って。「うちは解放されたんですよ」って。「朝鮮人探しましょう」って。俺、朝鮮人やだと思ってるのにさ。「探しましょう」って。最初は嫌だけど、だんだんだんだん来ると悪いと思って行くよ。行って話聞いてみて、あれ？　俺が考えてた全然違うなと。こういう気持ちになってきた。

——三一学院だと、その当時ちょっと思い出したんですけども、<sup>パクウンチョル</sup> 朴恩哲 って人が中心になってやってたと思うんですけど。分からないですか？

金：僕らんと、キム・チョンニョンだ。

（以下、次号）

\* 本研究は科学研究費補助金（課題番号 24530639）の助成を受けたものである。

## 【用語解説】

### \*1 協和会

戦時期に在日朝鮮人の統制や皇民化を推進した組織。全国各地に組織されていた「内鮮融和」を目的とした団体を統合・改編して、1939年6月に財団法人中央協和会が設立された。支部は全国の各警察署に置かれ、警察署長を支部長とし、全ての在日朝鮮人を会員とした。協和会は、朝鮮人の動向監視や渡航管理の他に、国旗掲揚、神社参拝、日本語や和服の講習などを実施し、志願兵募集や徴用者の動員にも大きな役割を果たした。1944年に中央興生会に改組され、1945年10月に解体された。（参考文献：国際高麗学会日本支部『在日コリアン辞典』編集委員会編『在日コリアン辞典』〔明石書店、2010年〕「協和会」の項（樋口雄一執筆）pp.228-230。）

### \*2 三一政治学院

日本共産党が運営した、朝鮮人活動家を養成するための学校。1946年3月に東京に創設された。院長は朴恩哲。第8期生（1948年3月入学）の修了を最後に、学生の受け入れは無期延期された。卒業生は在日本朝鮮人連盟の活動に従事した。（参考文献：鄭栄桓『朝鮮独立への隘路——在日朝鮮人の解放五年史——』法政大学出版局、2013年。）

ただし金玉来さんは大阪に住み続けておられたので、通ったのは東京の三一政治学院ではなく、大阪で運営されていた八一五政治学院であった可能性もある。